立教開宗800年をお迎えするにあたって

―「顕真実」を心に刻む―

満井秀城（みついしゅうじょう）

「親鸞聖人には立教開宗の意図はなかった」との主張を聞くことがあります。確かに主観的（親鸞聖人の思い）には、その通りでしょう。高僧和讃に、

智慧光のちからより　本師源空あらはれて
浄土真宗をひらきつつ　選択本願のべたまふ

（『註釈版聖典』596ページ）

と詠まれるように、浄土真宗の宗義を開かれた（開宗）のは、源空聖人（法然聖人）であると高らかに讃えられています。そして、『歎異抄』には、

よきひと（法然聖人）の仰せをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり。

（同 832ページ）

と述べられるように、恩師法然聖人の仰せ以外には、他に何もないとの表明も見られます。

しかし、その一方で、客観的には、そうとも言い切れない面があります。

親鸞聖人四十歳の時、法然聖人がご往生されました。その後、『選択集』が開版され、それによって初めて、明恵上人は、「菩提心を非本願の行とする」、『選択集』の論理を目にすることになったわけです。明恵上人は直ちに反論の筆を執り、『摧邪輪』で、「菩提心を否定したら仏教ではない」と激烈に批判しました。しかし、法然聖人は、すでにご往生ですから、法然聖人から直接の反

論はできません。そのため、後の弟子たちには、「仏教ではない」との批判に応答する必要が生じました。鎮西派の弁長や西山派の証空が、それぞれに明恵上人への反論を提示し、親鸞聖人も、同じ課題から独自の論理を提示されたのが、「信文類」の「横超他力の菩提心」でした（同 246ページ）。

また、法然聖人にとっては、それまでの聖道の「諸行」に対して、「念仏一行」、「専修念仏」を明らかにされることが課題でした。そのご努力によって、「専修念仏」の法義が確立されましたが、その後には、「同じ念仏を称えているのに、なぜ、迷い続ける者と、さとりへと至りうる者との違いがあるのか」という課題もありました。だからこそ、親鸞聖人は、根底にある信心を問題とされ、自力と他力の違いによって、報土と化土に分かれるという因果を「化身土文類」で詳述されたのでした。

このように、法然聖人ご在世の時には想定されていなかったような、新たな課題への対応が示されるのも『顕浄土真実教行証文類』なのです。

＊　＊　＊

しかし同時に、親鸞聖人によって提示された論理は、法然聖人から受け継がれた論理とまったく同一です。と言うか、親鸞聖人の論理、法然聖人の論理、あるいはそれに先立つ善導大師の論理という風に、個人単位の論理として区別するものでもないと思います。それは、「仏の論理」、「本願の論理」として共通しているからです。

法然聖人以前の日本仏教では、「八宗兼学」が常識でした。奈良時代の南都六宗と、天台・真言の平安二宗とを併せた八宗を、兼ね学ぶことが求められていました。一つのことだけよりも、複数兼ね具えた方が、効果や功徳も高いと考えたのです。一般の集合論からは、「一行」よりも「諸行」の方が勝れていると考えられるでしょう。しかし、これは、所詮人間の論理に過ぎません。「諸行」は、いくら集めても、各々個別の功徳しか持ちえません。これに対して、「念仏一行」には、「万徳の帰するところ」（同七祖篇 千207ページ）として、あらゆる功徳が込められており、「念仏一行」が、あらゆる「諸行」に勝るのです。これこそが、迷いの「人間の論理」から、真実の「仏の論理」への大転換でした。私たち人間の側はつねに虚仮不実であり、真実は仏の側にしかありません。

別の視点で言えば、「八宗兼学」は、多くの人が実行不可能です。八宗兼学では救いの対象外とされていた

人々が、念仏一行の教えによって、すべて救われていくあり方が初めて提示されたのです。すべての人が等しく救われる大乗仏教の目的が、本当の意味で開かれた一瞬でもありました。

＊　＊　＊

立教開宗から800年が経とうとする現在、「仏の論理」、「本願の論理」が、人々に理解され、人々の支えとなっているでしょうか。現代は、少なくとも物質的には便利で快適なため、「今さら信心や念仏などなくても、何の不自由もない」と考えられているように感じます。何の不自由も感じずに、自分が迷っている自覚もなく、「生死出づべき道」が課題にならない人には、「さとり」も「浄土」も響くはずはなく、「浄土」が理解できない人には、親鸞聖人が拓かれた「現生正定聚」の意味や意義もわからないという負のスパイラルに入っているのが現代ではないでしょうか。

その一方で、特に都会では、人口は多くても人間関係はむしろ希薄と言え、「孤独」や「孤立」がキーワードとなっています。そして、「自由競争」や「自己決定」の美名の下に、人々は追い立てられ、息苦しさに悶えてもいます。

「信文類」では、阿闍世の救いの中で、真っ暗な夜道を歩く旅人に、月の光が突然差し込んできて旅人に勇気と安心を与える「月愛三昧」が示されています。孤独な闇の中を歩く現代人に対し、仏の光に照らされて、安心と喜びの旅路を歩んでいける道が提示されています。また、阿弥陀仏の「摂取不捨」のお慈悲こそは、どこまでも摂め取って捨てないという、仏とともに歩む大道でもあるでしょう。

親鸞聖人の時代と、現代の私たちとで、混迷の様相は異なっていても、人々は同じように悩み苦しんでいます。どちらも、人間の論理に苦しみ、人間の論理に振り回されているのです。人間の論理を超克すべく、時代や地域を越えた普遍的な真実を問い、そして辿り着かれた親鸞聖人の結論が、『顕浄土真実教行証文類』に集約されています。同書に記された「元仁元年」を「立教開宗」の起点としています。標題に込められた「顕真実」の姿勢を、あらためて心に刻んでまいりたいと思います。